



大船鉾巡行(平成26年)と「安曇磯良の天冠」

#### 第四号 平成28年7月5日 祇園祭余話(安曇磯良の天冠)

祇園祭山鉾巡行のとき、前(さき)祭の殿(しんがり)をつとめる船鉾(出陣の鉾)は 舳先(へさき)から順に、安曇磯良(あずみのいそら)・住吉明神・神功皇后・鹿島明神の四柱の御神体人形を祀る。舳先に立つ安曇磯良は 阿渡部磯良(あとべのいそら)ともいい、海人族安曇氏の祖神で海底に住むという。

神功皇后が新羅を攻めるために、天神地祇を常陸の鹿島に招いて 軍(いくさ)評定を行ったとき、阿度部磯良一人だけが遅れて来た。その容姿は貝殻や海藻が取り付いた醜いものであったので、「かかる形にてやんごと無き御神前に参らんずる恥ずかしさに、今まで参りかねて候・・・」と、『太平記』巻第三十九に記されてある。そして磯良は竜宮城の宝である 干珠(かんじゅ)・満珠(まんじゅ)を奉り、それを用いて神功皇后は遠征に勝利した。

後(あと)祭の殿をゆく大船鉾は、その時の帰陣(凱旋)の姿を現しているといわれる。

大船鉾は元治元年(1864)の禁門の変で木部を焼失して以来、巡行を休止していたが、町衆の努力により平成26年に150年ぶりに復興を果たした。幸いにも一部の懸装品と主祭神である神功皇后の御神面は焼失を免れていた。

復興後はじめて大船鉾が都大路にその姿を現したとき、沿道の人々からは大きな歓声があがった。そのとき、四条町大船鉾保存会理事長(松居米三氏)は、安曇磯良が立たれるはずの舳先の右舷に座し、大船鉾巡行の安全を祈念していた。

その膝の上には、8名の有志の寄付によりすでに完成していた「安曇磯良の天冠」が置かれていたのである。

NPO法人京都観光文化を考える会・都草

特別顧問 坂本 孝志